



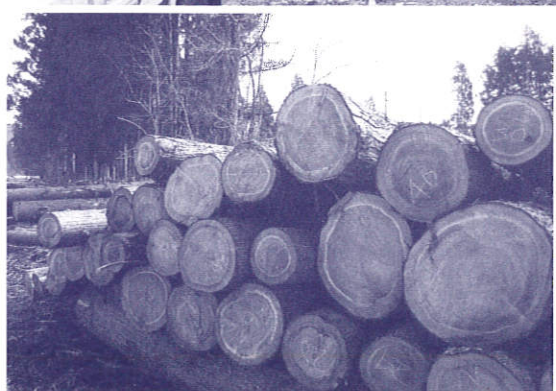
# 水辺のひろば

No.21

2015年4月1日発行



伐採しても木は売れない。しかし、切らなければ…。



**木を植える時代から切る時代へ 木を切らないと里が守れない!?**

戦後、山は資源を得る大切な場でした。動植物を採り食糧などにするのは勿論ですが、柴を刈って燃料に、炭を焼いて現金収入に。住宅材としての木材資源の確保のため、植樹も盛んに行われました。

ところが、エネルギーが薪や炭から化石燃料に替わり、経済がグローバルになり、安い木材が輸入されるようになると、木材の需要は減り、地産地消は一気に崩れて、山は荒れ放題になりました。

荒れた山は、やがて環境にも悪影響を与え、耕作放棄地が増え、人と生き物の境界線が定かでないにつれ、里では動物による被害が始められました。猿に始まり、熊、カモシカ、最近ではイノシシも出没しています。

そこで、今盛んに山沿いで取り組んでいるのが木の伐採です。動物被害を食い止めるための伐採です。伐採しても木は売れませんが、費用を掛けてでも切らないと、わたしたちの暮らしが守れなくなり、資産にと植えた木なのですが、今や負の遺産に近い。それがこうなることを予測したのでしょうか。



## 失われた宝物 ①

### まぼろしの魚「イトヨ」



イトヨという魚をご存じですか。私の子供の頃には、イトヨはスーパーでパック詰めに売られていました。体のあちこちからトゲが出ていて、見た目にも「おいしそう」とは思えませんでした。

私が初めてイトヨを見たのは40年くらい前、小学校三年生の時でした。小舟町(新発田市)に住む友人N君の家の裏手、水の干上がった用水路で死んだイトヨを見つけ、とても驚きました。通常の魚の概念を超えていたからです。体の色はメタリックブルーで光っていて、しかも体のあちこちにト

ゲがついていました。N君が「イトヨだよ。」とそのとき教えてくれました。N君はかなり詳しくその魚のことを教えてくれました。産卵期に海から川を上ってくるので、その時は婚姻色でオスとメスで色が違うこと、オスはメタリックブルーで、メスはゴールドになること、水中に巣を作った中に卵を産むことなど。

高学年になって本格的にイトヨを捕まえることにチャレンジしました。なかなか捕まえられませんでした。なんとか数匹捕まえることができた。そこに投網をもったおじいさんが現れました。イトヨ専用の小型の投網です。打ったびに何十匹ものイトヨが捕れ、「すごい!大人になったら俺もイトヨを投網で捕りたい!」と本気

で思いました。しかし現在、イトヨは減少の一途で、阿賀野川では2006年を最後に目撃がないようです。原因は様々あるとは思いますが、「しかたがない」の一言でくくることはできないと思います。(O・N)

### 一緒に活動しませんか 新会員募集中

加治川ネット21では、会員を募集中です。生物や植物に詳しい人、野外活動の好きな人、自然環境に関心のある人、子どもたちと活動してみたい人など、まずは会員になって、一緒に活動してみませんか。入会希望のかたは、このページの欄外に記載しているメールアドレスか事務局にご連絡ください。

### 寄稿 殿様街道てくてく旅 ⑭ 小山から江戸を目指して

春と秋に1回ずつ行い、わずかながらも江戸に近づいていた私たちの旅が、思いがけずもあの2011年3月の大震災と原発事故の影響を大なり小なり受け、この年は春の旅を中止して秋も深まった11月に1回だけということになった。前回の終着地、栃木県小山市は、1年前と同じように秋の陽の中で平和だ。こうして徒歩旅行できる幸せを旅の始めに再確認した。

今回も国道沿いの道路ばかりだが、たわわに実った柿やザクロが塀を越えて枝を垂らしている。採る人もいないようなので時折失敬して秋の味覚を楽しんだ。

「にっこり」と大書された手書きの看板に誘われて立ち寄ってみると「日光梨」の直売所。新高梨に似た巨大梨で、皆で1個ずつ買い求める。次には、通りに面した酒蔵で「若盛」「門外不出」という酒を買った。名前に惹かれて。

間々田では、「間々田紐」という店を発見。組紐の類で由緒ある物らしいが、作り手の店主は若い青年。相撲の化粧回しや刀のつばの紐、帯締めなどの他に、ループタイや携帯ストラップといった品々も作っていた。その時に買い求めた携帯ストラップは3年経った今でも紐に乱れは無く、酷使に耐えている。

こうして寄り道ばかりしているので、古河で昼食の予定がその遥か手前でお昼となり、古河についたのは午後3時半!! 古河での話は、また次回としよう!(恵)

「てくてく旅」は加治川ネットの有志が、参勤交代で殿様の歩いた街道を歩き歴史を感じようと、2007年から会津を目指し少しずつ歩き始めました。「会津」到着後、折角なので「江戸」へと歩みを進めています。

**《編集後記》**

新潟日報に、いしがた戦後70年特別企画「不屈つかんだ大地」という特集が掲載されていました。戦前にはブラジル移民や満州開拓がありました。こちらは敗戦後の開拓による入植です。食糧難から行った拙速事業で、共に「厳しい開拓条件」に変わりありませんが、入植者たちの70年の歩みです。言葉には表わせない苦労が活字の下に眠っていることでしょう。

私たちの周辺にでも、戦後の人口増加による食糧難から開拓された地域も少なくありません。しかし、成長を追求する政策は、その後、人を農村から都市に移動させて行きます。70年経った今、社会構造の変化と少子高齢化で耕作放棄地も増え、資源の供給基地である地方が衰退しています。農業者の平均年齢は70歳に近く、先の読めない状況です。

かつて開拓に汗を流した人たちは、今の状況をどのように思っているのでしょうか。ふるさと創生は待たない。小手先の政策では変わりません。(S・K)

設立	1996年11月。2003年5月法人化
活動目的	21世紀を生きる子どもたちにより環境(自然、伝統、文化)を残し、伝える。
主な活動	水と親しむ水辺の大楽校、生き物調査、小学校環境学習支援、川辺や町並み散策、手前みそ作り、シンポジウム開催
受賞歴	環境大臣表彰、新潟県環境賞、「日本の水をきれいにする会」会長表彰ほか
年会費	法人会員10,000円、個人会員2,000円

## 2015年総会開催 新年度事業いよいよスタート

平成27年2月11日、当会通常総会が新発田市ボランティアセンターで開催され、新年度事業計画や予算案が承認されました。

事業計画は新年度も環境の保全を図る活動、社会教育の推進を図る活動、文化の振興を図る活動などを柱に、主催事業としては、夏の恒例事業「加治川と親しむ「水辺の大楽校」、第9回目となる「小学生による環境学習パネル展」、国産味噌を使った「手前味噌づくり」、協力事業として、学校や地域などに出向いての環境学習や生き物調査、竹俣活性プロジェクトの農業体験などが予定されています。

また新規事業として、里山の鳥獣害勉強会も計画に入れました。最近問題



水辺の大楽校は8月に予定



農業体験「稲刈り」は9月下旬に。

となっている鳥獣害について、会として取り組む方法を探っていきます。

### 記念講演は「原発から避難そして再起を」

総会後の記念講演は、胎内市の榎ふるさと福島代表の泉田昭さんが講師。泉田さんは四年前、東日本大震災で福島県南相馬市の自宅から同市の避難所、長岡、湯沢と避難場所を変え、最後に落ち着いたのが、現在居を構えている胎内市でした。

避難生活を送りながら考えたのは、何か役に立つことをしたいということ。まずは農業経験を生かし平成23年から「きずな農園」を運営し、避難者に交流の場や土に触れることでの心の安定を提供、更に栽培した大根を南相馬市や胎内市の学校給食へ提供しました。次に起業です。泉田さんは胎内市が

避難者を雇用してくれていることに感謝しつつも、「避難者が胎内市に雇用されれば、その分、胎内市民の雇用の場を奪っていることになる。雇用のパイが決まっているのなら避難者の分は新しくパイを増やすことが必要」と考えていたからです。

村上市ではまゆ玉を採るため桑を栽培していますが、葉は使わず廃棄されています。桑ならば地元で会社と競合せず、また廃棄していた葉が売れるとなれば農家の役にも立つなど利点が多いことから、桑茶パウダーの開発に取り組み、平成25年に榎ふるさと福島を起業し製造販売を始めました。現在、桑茶パウダーや、パウダーを使ったクッキーやカステラなどの商品を開発中。新発田市や胎内市で販売しています。

桑の葉は食後の血糖値の吸収を緩やかにしたり、ポリフェノールが細胞の老化を防止したりと効能もいろいろあるようなので、今後も商品の種類が増え、雇用も期待できそうです。廃棄していた桑の葉が売り物になるというので、生産農家もよりよい桑の栽培に力を入れるようになりました。

ふるさと福島では、今年4月に農家レストランをオープンさせ、避難者を更に雇用する予定で、泉田さんの考えの未来図が少しずつ実現しています。原発の恐怖、進まない賠償問題、老親の介護、避難生活を送る中での体験談、起業するまでの苦労話など、1時間では時間が足りないほど盛りだくさんの内容でした。

### シリーズ 田んぼや川の生き物①

今号から田んぼや川などに生息する身近な生き物をシリーズで紹介いたします。最初は、当会が保全に力を入れているイバラトミヨです。



イバラトミヨ

イバラトミヨは体長5cm程度の小さな魚で、湧き水のある場所に生息します。背中にトゲがあるのが特徴で、地域により「イシャジャ」、「トゲソ」などとも呼ばれており、水草を利用して巣を作り、オスが子育てをする魚です。

新発田市では絶滅したとされていましたが、2002年に六日町の天辻川で発見され、その後、太歳や久保地区でも発見されています。県内では新発田市のほか五泉市や胎内市などに生息し、市民団体による保全活動が行われています。当会では毎年、春と秋に久保地区の川で、イバラトミヨをはじめとする生き物の生息状況や環境の変化を調査しています。



## カワウ



今回は加治川流域でみられるようになったカワウの現状をお知らせします。

### カワウと上手につきあうために

カワウは、1970年代には絶滅が心配されるほど激減しましたが、1980年代から増加し始め、現在では全国の主要な河川のほとんどの、コロニーやねぐらが確認されるほど増加しています。

県内では十日町市、長岡市、阿賀町など16か所で繁殖地が確認され、2007年に478羽だったものが2013年には1828羽に増加しています。河川の魚類等の具体的な被害調査はこれからになるそうですが、アユやウグイばかりでなく、錦鯉や養殖ニジマス、稚魚も被害に遭っています。近隣の福島潟でもねぐらが確認され

ており、加治川でも見かけるようになり、新発田市でも食用鯉に被害があったそうです。

カワウは、よく鵜飼いの鵜と間違えられますが、鵜飼いの鵜は「カワウ」ではなく、よく似ている「ウミウ」です。

カワウは、全身黒っぽく、大きさは体長80cm、体重2kg程度、1日の行動範囲は30〜60kmに及びます。コロニーやねぐらを形成し、冬期に繁殖を開始して3〜5個の卵を産みます。もっぱら魚類を餌とし、捕食量は3〜30cmの魚を1日あたり500gも食べます。そのため、カワウが確認されると、川に放流されたアユや鮭の稚魚への被害が心配されています。

被害防止策としては、銃器による駆除、巣へのドライアイスの投入による卵の殺処分(ただ卵を取り去るだけではまた産むため)、ビニールテープや糸、網を池を覆うなどの進入防止などが行われています。また、全国内水面漁業協同組合などが「そだ沈床工法」による魚の保護効果調査を行っています。

野生鳥獣による被害に共通の課題ですが、相手は昔から地域の生態系を構成する一員であり、生態系保全のために根絶やしすることはできません。今後、被害を容認できる範囲で個体数を管理し、共存していく方法を考えていかなければなりません。

## 環境豆知識 Vol.19 電(ヒョウ)と霰(アラレ)

今回は、知っているようで知らない電と霰の違いについてです。ともに雨が凍ってできる氷粒ですが、霰は冬の始めや冬季に降り、電はこれからの初夏の季節に降ることが多いです。

色と形については、白色で不透明で大きさが5ミリ未満の氷粒が霰で、大きさが5ミリ以上の透明な氷粒が電というふうに区別します。

雲の中で冷たい雨が冷却されて氷の粒ができ、その粒が強い上昇気流の雲の中で下降したり上昇したりを繰り返します。そのうち粒の周りにどんどん冷却水が付着して粒は成長し、やがて重さに耐えられなくなり地表に落ちてきます。それが電や霰です。

時にゴルフボール大やそれ以上に成長し、野菜や木の葉を撃ち落とし、ビニールハウスの覆いや窓ガラスを壊すなどして被害を及ぼすことがあります。

多くの場合雷雨を伴うので、雷を察知したら建物内に避難しましょう。

## 活動 スナップ

昨年11月に開催した第8回パネル展には18校の作品が展示されました。今回も小学生の細かい視点があちこちに。



小学生による環境学習パネル展



手前みそづくり

3月14日、今年度最初の事業の味噌作りは、60人以上が参加。今回は味噌を使った漬物やドレッシングなども紹介。

